

## ホーソーンの“Legends of the Province-House”に見られる政治性

稲 富 百合子

### 序

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) の短編「総督官邸に伝わる物語」(“Legends of the Province-House”)<sup>1</sup> は、4つの短編から成り、それぞれ『デモクラティック・レビュー』(*The United States Magazine and Democratic Review*) に1838年から1839年にかけて発表された。この四部作のタイトルと出版年を確認すると、第一部「ハウの仮装舞踏会」(“Howe’s Masquerade”)は1838年5月号に、第二部「エドワード・ランドルフの肖像画」(“Edward Randolph’s Portrait”)は1838年7月号に、第三部「レディ・エレアノアのマント」(“Lady Eleanore’s Mantle”)は1838年の12月号に、第四部「オールド・エスター・ダドリー」(“Old Esther Dudley”)は1839年の1月号に掲載された。それぞれの作品は、植民地時代の総督官邸にまつわる伝説であり、アメリカの独立戦争の出来事を扱ったものである。語り手によると、ボストンのワシントン通りにあるこの建物は、以前はマサチューセッツ植民地の総督官邸であったが現在は宿屋兼酒場になっている。時代設定は19世紀初頭であり、物語は語り手がこの旧総督官邸を訪れて耳にした伝説を、読者に向けて語り直すという構造である。この四部作は後にまとめて『トワイストールド・テールズ』(*Twice-Told Tales*, 1842) の第2版に再収録される。多くの批評家たちが指摘しているように、これら4つの短編はそれぞれを単独で扱うのではなく、一連の作品として扱わなければ、作家ホーソーンの真の意図は見えづらいものになってしまう。阿野文朗氏によると、「ホーソーンはもともと作品を分割して発表することを好まず」、「自分の小説には一つの観念が鉄棒のように通っているので、何週とか何カ月とかの期間を置いて読まれると耐えがたいほど退屈なものになってしまう」と考えていたようである。<sup>2</sup>したがって、本論でも四つの作品を通して考察していきたい。

ホーソーンの歴史小説を扱う時、注意すべき点は、歴史上の人物に対してホーソーンが取る距離感だと思われる。「総督官邸に伝わる物語」が執筆されていた時期、歴史家ジョージ・バンククロフト (George Bancroft) の『アメリカ合衆国史』(*History of the United States of America*, 1834-1875) にも見られるように、領土拡張主

義のもと、アメリカでは歴史の神話化が進んだ時代である。異孝之氏は、ホーソーンこそ、「明るく陽気で楽観的なバンククロフトの歴史観に対して、最も本質的な論点より真っ向から批判を加える立場にあった同時代人」だとし、「セイラムの魔女狩りに加担した先祖を持つ彼にとって、巡礼の父祖たちは必ずしもさほど単純明快に民主化してしまえる相手ではなく、むしろアンビヴァレンスを孕んだ怪物である」と評している。<sup>3</sup>たとえば、ジョン・エンディコット (John Endicott) は、ホーソーンのいくつかの短編に登場する人物であるが、エンディコットの描かれ方は作品によって異なっている。<sup>4</sup>「総督官邸に伝わる物語」に関しても、植民地時代の人物の描写は、読者にそのまま受け取るよう要求しているとは言えないようである。

ここでホーソーンが4つの短編を連載することになった『デモクラティック・レビュー』の雑誌の特質について簡単に触れておく必要があるだろう。この雑誌はジョン・オサリヴァン (John O’Sullivan) が編集者となり、彼の依頼でホーソーンはこれらの短編をこの雑誌に寄稿することになる。それは Larry Reynolds が指摘するように、ホーソーンとオサリヴァンが多くの政治的信念を共有する親しい友人であったからである。

Hawthorne found the *Democratic Review* congenial and subsequently published twenty-five stories in its pages. He and O’Sullivan shared a number of political principles, including a commitment to pacifism, and they became good friends (the Hawthornes chose O’Sullivan to be the godfather of their first child, Una).<sup>5</sup>

さらに、オサリヴァンと言えば、「明白なる運命」(“Manifest Destiny”)という帝国主義的なスローガンを掲げた人物としても有名である。オサリヴァンが編集委員を務めていた期間、この『デモクラティック・レビュー』には、ホーソーンのみならず、ポー、ソロー、ホイットマンなども寄稿しており、19世紀の主要な文学雑誌となる。民主党員であるオサリヴァンが、アメリカの民主的精神を打ち出す雑誌を創刊するにあたり、ホーソーンに作品を熱烈に要請していたことを踏まえて、阿

野氏は、「ホーソーンのこれらの作品が一見、国粹主義的な印象を与え、そしてホーソーンがオサリヴァンの期待に応えるべく精一杯の努力をしたように見えることも事実」であると指摘している。<sup>6</sup>つまり、ホーソーンは政治性の強い性格を帯びていた雑誌に、植民地時代のアメリカを舞台にし、独立戦争の前後を含む期間のアメリカ建国の父祖たちとイギリスとの政治的問題を扱いながら、オサリヴァンだけでなく、当時の読者の期待に添えるような作品にしようとしたとも考えられるだろう。

しかし、ホーソーンがオサリヴァンの政治思想に常に同調していたわけではなく、彼の思想に欠点も見出していたことが、次のL. Reynoldsの引用から理解できる。

Although Hawthorne claimed O'Sullivan as a friend and sought his support for political patronage, he was well aware of his faults, especially financial and political recklessness and his lack of penetrating thought.<sup>7</sup>

では、ホーソーンは政治思想とはいかなるものであろうか。丹羽隆昭氏は、まずホーソーンは政治への関わり方について、ホーソーンが「民主党を通して生活の糧を得るとともに、当時の政権の中核近くに絶えず身を置いていた」ことを強調する。<sup>8</sup>たとえば、ホーソーンは「民主党員」として税官吏を二度務めたが、「民主党員」ゆえに政権が変わると税関の職を解雇されており、また、大統領選に民主党候補として立った親友フランクリン・ピアス(Franklin Pierce)のために選挙用伝記を執筆し、その見返りに駐英アメリカ領事の職を得ることになったという経歴がすぐに思い出されるだろう。さらに、丹羽氏によると、「現実生活でのホーソーンは、絶えず政治の激しい波に洗われ続けた」のであり、したがって、文学作品においても、ホーソーンは「政治に対する姿勢、とりわけ『民主主義』への思いが、間接的、あるいは巧妙にカムフラージュされた形で表明されている」という。<sup>9</sup>本稿では、ホーソーンは政治性的一端を明らかにするために、まず語りの観点から、次に歴史物語の観点から、「総督官邸に伝わる物語」を考察してみたい。

## I. 語りの問題

まず、4つのそれぞれの作品に共通する語りの問題について考察していきたい。先ほども少し触れたが、4つの作品の物語構造は、1838年頃、語り手である「私」は、総督官邸を舞台に繰り広げられた植民地時代の伝説を耳にし、それを読者に語り直すという形式である。舞台となった総督官邸は、元々1679年から1714年までイギリス人商人であったピーター・サージェント(Peter Sergeant)が自分の住居として使用した建物であった。

その後、この建物は1716年に勅任総督の公邸用に購入され、1718年から1776年まで使用された後、民間の手に渡る。この旧総督官邸の建物は、その後トマス・ウェイト(Thomas Waite)という名の人物が経営する宿屋兼酒場となっている。作品の語り手は、最初に、このレンガ造りの旧総督官邸の様子を事細かに説明するのだが、一方で、曖昧な点も交えている。その点について次の引用で確認する。

These letters and figures - 16p.s.79 - are wrought into the iron-work of the balcony, and probably express the date of the edifice, with the initials of its founder's name. (185)

このように、後に総督官邸となるこの建物が1679年にピーター・サージェントによって建てられたという事実を、ホーソーンは、数字と文字の組み合わせが示すものを語り手に断定的ではなく、推測する形で語らせている。ホーソーンは歴史を題材にする際、作品に出来事の正確さではなく、信憑性を求めていると考えられる。ホーソーンは、作品の中で敢えて実際の出来事からずらしたり、曖昧にすることがあるのだが、それは、歴史を忠実に再現するのが目的ではなく、「人間の心の真実」を描くためだと考えられている。ホーソーンは創作のこのような特徴について、入子文子氏は、短編「ある鐘の伝記」(“A Bell's Biography,” 1837)に注目して次のように述べている。

「ある鐘の伝記」は、「伝記」と銘打っているだけに史実に忠実な記述を期待させる。しかし、「鐘の伝記」のテキストの一見史実とおぼしき記述内容と、このスケッチの典拠と思われる資料の内容とは、著しく異なる。事実の異化、曖昧化、匿名化、視点ずらしが行われるのである。<sup>10</sup>

この入子氏の指摘は、「ある鐘の伝記」のみならず、ホーソーンは歴史を扱った作品全般に当てはまるだろう。作家が、過去の歴史のエピソードから引き出される教訓について、信憑性を持たせて伝えるためには、歴史の証人となる装置が必要となるように、「ある鐘の伝記」において「鐘」が歴史の証人としてアメリカの独立を語るなら、「総督官邸に伝わる物語」の四部作においては、「総督官邸」がそれにあたるだろう。他の作品においても、例えば『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)であれば、語り手が税関でたまたま見つけ、自身の胸に当てたAの文字は、たとえそれが語り手の創造物だとしても、物語の中で17世紀の歴史の証人としての役割を担っている。歴史を題材にし、作家が創造する架空の物語に、このような装置が真実味を付与する役割を果たすのである。四

部作に話を戻して、次の鴨川卓博氏の引用を参照したい。

この建物は歴史的事実で、いわば、植民地が本国から独立するという重要な歴史的变化の目撃証人である。それだけで十分に喚起的であり、それに絡めて実際の歴史的な事件が語られれば格好の歴史物語となる。この「伝説」は、この実在の建物を構成の軸として、その中で起こったとされる幾つかの架空の出来事を、実際の歴史的事件と絡めて一つの物語にまとめたものである。<sup>11</sup>

このように、四部作を通して歴史の目撃者となり、「過去」から「現在」へと橋渡しをする役割となるものが「総督官邸」であり、過去にこの官邸に住んだ人物をめぐって話が展開されるのである。

次に、総督官邸にまつわる伝説の粗筋を追いながら、四部作が一連の伝説として機能していることを確認したい。

第一部の「ハウの仮装舞踏会」では、ある夏の夜、語り手である「私」は、今は宿屋兼酒場となったこの旧総督官邸に赴く。主人のトマス・ウェイトが飲み物を用意する間、建物内を見て歩き、また酒場に戻り、その場に居合わせた老紳士の昔話に耳を傾ける。その話は、ボストン包圍戦の結末近くになって、王党派の総督ウィリアム・ハウ（William Howe）が仮装舞踏会をこの総督官邸で催した時のエピソードである。

第二部の「エドワード・ランドルフの肖像画」では、ある一月の夜、語り手は、ベラ・ティファニー（Bela Tiffany）という名前の老人とこの酒場でウイスキーをすすりながら、この旧総督官邸の部屋に掛かっていた不思議な肖像画にまつわる伝説を教えてもらう。

第三部の「レディ・エレアノアのマント」では、ある夜、語り手はこの酒場の主人であるトマス・ウェイトに招待され、第二部でも伝説を話してくれたティファニー老人と夕食をとるように言われる。ティファニーはここでも伝説を語り手「私」に伝える。その話は、エレアノアという美しく若い女性が、マサチューセッツ湾植民地総督のシュート大佐（Governor Shute）に護衛されながら、後見人としての大佐の保護を求めてイギリスから到着する場面から始まる。

第四部の「オールド・エスター・ダドリー」では、語り手「私」が、ベラ・ティファニーと酒場の主人トマス・ウェイトと共に、王党派の老人が語る伝説に耳を傾ける。その内容は、第一部でも登場した王党派のウィリアム・ハウ卿が総督官邸を去らなければならない日が近づき、雇い人であった老女エスター・ダドリーに総督官邸の鍵を渡す。長年国王に忠誠を誓い、代々の総督を見守ってきたエスターは、この官邸を離れることが国王への忠誠心を捨てることになると考え、最後の勅任総督が去るま

でこの官邸を死守することを自分の運命だと考えている。

語り手である「私」は、酒場で聞いたこれらの伝説を読者に語り直す前に、その伝説が語り手自身の想像力によって脚色されたものであることを初めに断わる。これは、ロマンス作家ホーソンの「中間地帯」を提供するための手段である。例えば、『緋文字』においても、序としての「税関」（“The Custom House”）を抜きにして、全体像を把握できないのと同じ構造だと言えるだろう。「総督官邸の物語」の4つの作品についてもその点を、次の引用を交えながら第一部から第四部まで順に確認したい。

まず第一部では、この伝説はそもそも老紳士が他人から又聞きしたものであり、「私」は絶対的な真実を語ることは諦め、新たな変更を付け加えたと述べている。

He [the elderly gentleman] professed to have received it, at one or two removes, from an eye-witness; but this derivation, together with the lapse of time, must have afforded opportunities for many variations of the narrative; so that, despairing of literal and absolute truth, I have not scrupled to make such further changes as seemed conducive to the reader's profit and delight. (187)

第二部の冒頭では、「私」はこの伝説が正真正銘の事実であると述べながら、実はロマンスの色合いを帯びていると説明する。

The following is as correct a version of the fact as the reader would be likely to obtain from any other source; although, assuredly, it has a tingle of romance approaching to the marvelous: (199)

第三部では、ティファニー氏と「私」は酒を飲みながら、ティファニー氏が話してくれた奇妙な伝説を「私」自身の想像力で脚色したと読者に伝えている。

This precious liquor was imbibed by Mr. Tiffany with peculiar zest; and after sipping the third glass, it was his pleasure to give us one of the oddest legends which he had yet raked from the store-house, where he keeps such matters. With some suitable adornments from my own fancy, it ran pretty much as follows: (211)

第四部では、老王党派の語りが先行する三つの伝説以上の修正が必要であったこと、そして、「骨の髄まで民主主義者」（“a thorough-going democrat” 226）である「私」によって読者に語り直されたときに、この伝説がかなりの変化を伴っている可能性があることを伝える。

Under these disadvantages, the old loyalist's story required more revision to render it fit for the public eye, than those of the series which have preceded it; nor should it be concealed, that the sentiment and tone of the affair may have undergone some slight, or perchance more than slight metamorphosis, in its transmission to the reader through the medium of a thorough-going democrat. (226)

以上の引用から、それぞれの伝説の冒頭で、語り手である「私」が、酒場で耳にした伝説、おそらく曖昧な記憶を基に語られた伝説を、自分の想像力を通して修正する必要があったと告白していることが確認できる。ここで興味深いのは、その伝説が酒場で酒を飲みながら老人の口から発せられたものであり、この歴史のエピソードを曖昧にするために酒の効果も働いているということである。少し話はそれるが、これらの作品においては、「酒」には他にも語りの重要な装置としての働きがあるようである。この点について、Michael Colacurcio は次のように述べている。

As they sip "port sanguaree," Bella Tiffany reminds his hearers that the siege of Boston is in its last phase; and we take note that Boston has indeed become a "bloody port."<sup>12</sup>

この Colacurcio の引用では、サングリアという酒が読者に喚起させるものが説明されている。伝説が語り直される前に、語り手が主人のトマス・ウェイトが作ってくれたポートサングリアを飲むという何気ない場面が描かれており、その直後に語られる伝説の冒頭部分では、ボストンが包囲されていたという時代背景が説明されている。したがって、読者はサングリアの赤い色から血の色に染まったボストンの港を連想させられるのである。今語り手が飲んでいる酒が、読者に向けて過去の歴史を彷彿とさせ、語られる伝説の世界へと読者を誘う働きをしていると言えるだろう。

そして、ティファニーの伝説に聞き入っていた語り手が現実に引き戻されるのも、トマス・ウェイトが客のために作っていたウイスキー・パンチのタンブラーの中で、スプーンがたてる音にかき乱された瞬間である。そうすると、「酒」が人の記憶を曖昧にする働きとしてのみならず、現在－過去－現在と時間を巧妙につなぐ装置としても働いている。さらに、もうひとつ「酒」と同じような機能を果たすものとして、ティファニー老紳士が吸っていた葉巻が挙げられるだろう。語り手は、老人の口から吐かれた葉巻の煙を吸って現実に引き戻され、同時に、その煙によって、たった今語られた老人の言葉が曖昧なものであるという印象を与える効果にもつながるのであ

る。この点について、本文から引用したい。

When the truth-telling accents of the elderly gentleman were hushed, I drew a long breath and looked round the room, striving, with the best energy of my imagination, to throw a tinge of romance and historic grandeur over the realities of the scene. But my nostrils snuffed up a scent of cigar smoke, clouds of which the narrator had emitted by way of visible emblem, I suppose, of the nebulous obscurity of his tale. Moreover, my gorgeous fantasies were wofully disturbed by the rattling of the spoon in a tumbler of whisky-punch, which Mr. Thomas Waite was mingling for a customer. (196)

このように、語り手は老紳士の言葉を「真実を語る口調」としながらも、その直後には語り手が聞いた伝説はそもそも正確さを欠いていると述べるのである。

先ほど引用したように、第四部では、語り手「私」は、それまで明言を避けていたにもかかわらず、ここで読者に自分が民主党であるという立場を明らかにする。すでに確認したように、この伝説は酒場に居合わせた王党派の老人の口から語られ、王党派の視点で語られたその伝説が民主主義者の「私」の視点で語り直される際に、語り手は、その前の3つの作品以上に大幅に修正して語り直す必要があったと述べている。つまり、それは歴史が誰の視点に立って語り継がれてきたかという問題をも浮き彫りにしているのではないだろうか。二項対立的に一方の側の価値観に基づいてアメリカの歴史が語られてきたこと、すなわち歴史の神話化に対するホーソーンの違和感が反映されているのではないだろうか。同時に、民主主義の性格を帯びる雑誌に掲載されることを考慮すれば、ホーソーンの語りの問題はさらに複雑さを増してくる。最後の四作目になって、語り手自身が民主主義者であることを告白したことによって、前の3つの作品における語り手のスタンスまたは作品の印象が微妙に変わってくるように思われる。そして「徹底した民主主義者」という語り手のこの告白も信憑性をなくしてしまうように思われるのである。

## II. 歴史物語の観点から

この章では、前章の考察を踏まえて、それぞれの伝説の中に登場する人物、すなわち、イギリスを体現する人物とアメリカを体現する人物に焦点を当て、どのようにホーソン自身の歴史認識や政治性が反映されているのかについて検証していく。

前章でも触れたように、四部作では、語り手が植民地

時代の過去を眺めるとき、王党派へ向けられる視線と植民地側へ向けられる視線に注目する必要があると思われる。

第一部の「ハウの仮装舞踏会」において、語り手である「私」は、旧総督官邸の中を歩きながら、バルコニーに出て、昔の総督官邸の威厳に満ちた様子を想像する。そして、語り手は、「いま、貴族的な古い屋敷は甲羅を経て衰えた顔を、成り上がり者の近代建築の背後に隠している」（“Now, the old aristocratic edifice hides its time-worn visage behind an upstart modern building.” 186）と述べる。この建物には旧世界のもつ優雅さや神々しさが存在していたはずだが、読者も語り手の想像の世界を共有することで、今ではさびれてしまった宿屋兼酒場に落ちぶれていることへの一抹の寂しさを感じるだろう。この一連の作品が、民主主義的政治色の強い雑誌に掲載されたにもかかわらず、ここではイギリスの貴族主義とアメリカの民主主義の対立的構図から、過去の消えてしまった貴族的なものへの語り手の好意的な眼差しが注がれているようにも思われる。この点に関して、鴨川氏は次のように指摘している。

このとき、彼は、明らかに、専制的で階級的な過去の肩をもち、独立革命がもたらした自由で民主的な現代を軽蔑するような態度を取る。これは、独立と民主・平等主義を何物にもまして尊ぶ、19世紀のアメリカ・ナショナリズムを背景に、滅びゆく過去に思いを馳せる余裕を示すジェスチャーで、専制の過去を打倒し繁栄している、しかし成り上がりの現在から、過去の栄光を改めて認め、さらに未来への展望を試みようという訳である。<sup>13</sup>

つまり、旧総督官邸の変貌を通して、独立革命への気運が高まっていた18世紀のアメリカが、自由という大義のもとに、イギリスを象徴するものを完全に消し去ってしまったことへの一種の批判としても捉えられないだろうか。それは、貴族的な華やかさが消滅し、アメリカには貴族主義が根付かないことを示唆しているかのようである。そして、この伝説が語られている1838年当時のアメリカは、先住民や奴隷制といった人種の問題を抱えながら、領土拡張や国家の統一を掲げていた時代であり、そうしたアメリカの在り方を、また、そのまま突き進んだ先のアメリカの未来の姿を、語り手は、すっかり昔の面影を失った総督官邸に逆照射しているのではないだろうか。

しかし、1838年当時のナショナリズム精神のアメリカの立場でこの作品が読まれると、イギリス側の植民地支配への批判的な視線が注がれているように描かれるのである。それは、伝説の中で、王党派総督ウィリアム・ハウ卿が催した仮装舞踏会が「死」を連想させる仮装行列

に一変してしまうことから理解できるだろう。

少し詳しくこの伝説の内容を確認すると、「ハウの仮装舞踏会」では、ハウが、ボストン包圍戦の結末近くになって、総督官邸で仮装舞踏会を開く。そもそもなぜ、植民地の反乱の鎮静に失敗したハウが、アメリカを去る直前にこのような仮装舞踏会を開くことができたのであろうか。その理由が次のように語られる。

[F]or it was the policy of Sir William Howe to hide the distress and danger of the period, and the desperate aspect of the siege, under an ostentation of festivity. (187)

阿野氏は、ハウが、フィラデルフィアを去るのを記念して催されたミシアンザと呼ばれる豪華絢爛な大舞踏会をヒントに、ホーソンが舞台を実際のフィラデルフィアから包圍中のボストンに移し、物語化したと推測している。<sup>14</sup> ここでも、ホーソン特有の史実をずらす手法がとられている。ハウについて史実に照らし合わせてみると、ジョージ3世が植民地の反乱を平定する任務を課したのがリチャード・ハウとウィリアム・ハウの二人の兄弟であり、ハウ家は王家と血縁関係にあり、ハウ兄弟は子供のころジョージ3世とは宮廷で遊んだ仲だったという。しかし、ハウ兄弟はジョージ三世の植民地政策には批判的であり、アメリカ植民地の様々な要求に対して理解を示していた。二人はアメリカを征服することは不可能であると考えていたので、ジョージ3世の要請を辞退するつもりであったが、国王の命令であればそうすることは不可能であった。<sup>15</sup>

物語に戻ると、このハウの送別会ともいべき仮装舞踏会では、イギリス軍の将校団と国王に忠実な植民地の上流階級の人々が歴史に名高い人物に仮装していた。そのごった返す人々のなかに、ホイッグ派のジョリフ大佐（Colonel Joliffe）が孫娘を連れて出席し、「清教徒風の無愛想なしかめっ面がその周囲に黒い影を投げかけて」（“The other guests affirmed that Colonel Joliffe's black puritanical scowl threw a shadow round about him.” 188）、人々を驚かせる。突然、葬送行進曲が流れ、舞踏会の様子が一変する。ジョージ2世の葬儀のときに流れた行進曲と同じ曲が流れ、その行進曲に合わせて、初期のニューイングランドの支配者たちの列、植民地総督たちに扮した行列が続く。その行列の最後の者の顔は隠されているが、その人物の服装はハウの服装とそっくりである。そのため、ハウは侮辱を受けたと感じて剣を抜くが、ハウはその相手の顔つきを見ると突如ひるんでしまう。

それでは、仮装舞踏会から一変した葬儀を思わせるこの列は一体何を表すのか。もちろんそれは、ハウの威厳がすでに植民地において消えてしまったことを暗示し、

ハウを代表する植民地支配者たちを追放することに成功したアメリカ側の勝利として捉えられるかもしれない。しかし、「清教徒風の無愛想なしかめっ面」のジョリフ大佐が「周囲に黒い影を投げかけた」点は見過ごせない。イギリスによる植民地支配の終焉を描き、アメリカ側の勝利を際立たせているように思われる一方で、ジョリフ大佐が体現するピューリタンの黒のイメージは、アメリカの勝利という楽観的な見方を読者に許さないのである。その点について、物語最後の語り手の言葉を参照したい。

The actors in the scene have vanished into deeper obscurity than even that wild Indian band who scattered the cargoes of the tea ships on the waves, and gained a place in history, yet left no names. (196)

ここに、アメリカ独立戦争のきっかけとなる1773年のボストン茶会事件の記述がみられるが、史実では、インディアンの格好に変装した植民地人が約一万ポンド相当の茶をボストン港に投げ込んだという。イギリス政府の植民地への課税対策として、度重なるアメリカ側の怒りを招くような法律が制定されたため、イギリスへの隷属化を断ち切ろうとする反対運動が、民衆による暴力行為や過激な形で起こっていた。その結果、アメリカの自由と独立への気運が高まっていくのだが、革命のために暴徒化する民衆の姿がインディアンに重ね合わされながら、一瞬ではあるが伝説の結末近くに現れることに少し違和感を覚える。同時に、王党派がインディアンの消えゆく運命と重ね合わせられることで、先住民を迫害してきたアメリカの歴史さへ示唆され、皮肉である。つまり、イギリスの支配に対してアメリカが平等や自由を唱えたと、それは消えていったインディアンの声とも重なり、アメリカの民主主義が、白人優位主義に立った帝国主義的な要素を併せ持つことを示しているのではないだろうか。一つの主義のために、その枠からはみ出す価値観を徹底的に排除しようとする、行き過ぎた行動の陥る結果を暗示しているようである。一つの作品の中でも、見方、視点がずらされることによって、語られてこなかった歴史を蘇らせていると考えられる。

次に第二部「エドワード・ランドルフの肖像画」に移る。副総督トマス・ハッチンソン (Thomas Hutchinson) の部屋に掛っているのがエドワード・ランドルフという人物の肖像画であるが、時の経過とともに色褪せて黒くなっている。ランドルフとは、最初の特許状を無効にしたため、自由を愛する植民地の人々の怒りを買った人物である。また、ハッチンソンはボストンの行政員たちの反対にも関わらず、イギリス軍の上陸を許可する書類に署名してしまう。すると、肖像画の中のランドルフがハッチンソンの方を向き、罪に苦しみもだえているかのよう

に見える。後にハッチンソンの死が近づいた時、ハッチンソンはランドルフの姿に似たという。トマス・ハッチンソンについて史実を確認すると、彼はアン・ハッチンソンの末裔にあたり、ボストンに生まれた。『マサチューセッツ植民地の歴史』 (*The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay, 1764-1828*) を執筆した歴史家でもあり、ホーソーン自身、彼の著書を熟読していたという。ハッチンソンは、マサチューセッツ総督の任期中、印紙条例、ボストン大虐殺、ボストン茶会事件といった問題に際して、イギリス寄りの態度を取ったため、民衆の反感を買い、結局、総督の地位を追われ、イギリスへ逃避することになり、イギリスで最期を迎えた。この作品の中では、アメリカ側の言葉を無視し、イギリス寄りの立場を示すハッチンソンを批判的に描く一方、語り手は、ハッチンソンが悩まされ続けたアメリカの民衆の暴徒化について、批判的な言葉を吐かせている。視点をずらすと、どちらの立場も導き出されるのである。その点について、以下の引用で補足したい。

Hawthorne's "Legends of the Province-House" ...can be seen as expressing his own unique combination of democratic and conservative sensibilities. He both supports the American colonists in their efforts to challenge British imperial rule and sympathizes which those British loyalists victimized by colonial crowds and mobs.<sup>16</sup>

第三部「レディ・エレアノアのマント」では、イギリスからやってきた美しく誇り高い女性エレアノア嬢が、刺繍が施された豪華なマントで身を覆っている。エレアノア嬢を崇拜するアメリカ人ジャーヴェス・ヘルワイズ (Jervase Helwyse) は、エレアノア嬢が馬車から降りる際に、エレアノア嬢の前にひざまずき自分の体を踏み台にしてほしいと懇願する。すると、誇り高いエレアノア嬢はそれを聞き入れる。エレアノア嬢とあまりにも卑屈なジャーヴェスとの対比により、支配する側と支配される側の関係が強調される。しかし、エレアノア嬢は、天然痘に罹り、亡くなる。エレアノア嬢のマントに天然痘の病原菌が隠れていたために、マサチューセッツ植民地に天然痘を蔓延させることになったのである。そして、このマントが燃やされると天然痘も終息する。マントが意味しているものは、エレアノア嬢のプライドを表していると考えられるのだが、天然痘に関して、その驚異の感染力については、L. Reynoldsの引用を参照したい。

Hawthorne thus uses the tale to vivify the metaphor of political "contagion," making it the equal of aristocratic pride in its virulence.<sup>17</sup>

この作品では、イギリスの貴族主義的なプライドを批判的に描いており、イギリスから新大陸に持ち込まれた疫病とその蔓延は、腐敗した精神とも捉えられるだろう。同時に天然痘などの病気により激減したアメリカ先住民の姿とも重なってくるかもしれない。マントを燃やすという行為は、イギリスの支配を忌み嫌い、独立への強い気持ちを反映しているだろう。一方、アメリカ側のジャーヴェスについても、イギリス寄り、アメリカの独立精神を貶めるような姿勢に対する語り手の皮肉をこめた批判が向けられている。

第四部「オールド・エスター・ダドリー」では、第一部で登場した王党派のハウが再び登場する。アメリカに敗れたハウが総督官邸を去らなければならない。雇われていた老女エスターはイギリス国王から遣わされた全総督に仕えてきた女性で、ハウがまた戻る日まで、この総督官邸で待っていると言う。エスターの忠誠心にハウは涙を流し、共に総督官邸から逃げるように勧めるが、エスターはそれを断わる。一人官邸に残ることを選んだエスターにハウが官邸の鍵を預ける。老女エスターは憐みと畏怖の念を誘い、官邸から追われることもなかった。エスターが鏡の中に王党派の総督たちの亡霊を呼び出すことができるという噂が広まり、町の子供たちが彼女を訪ねてくるようになると、エスターは子供たちに昔話を聞かせる。エスターとアメリカの子供たちとの交流を通して見えてくるのは、エスターへ向けられる共感である。ついに、新しい総督がやってきたという幻聴から、長い間主人不在の官邸を守ったエスターが官邸の鍵を開けると、そこにはマサチューセッツ州の最初の知事ジョン・ハンコック（John Hancock）が立っている。王への忠誠心を忘れずに一生をささげてきたエスターは、この事実衝撃を受け、無念の中で亡くなる。

この作品もまた二重の意味を提示している。新しいアメリカの誕生と共に、王党派の総督ハウが去り、民衆の手によって選出されたハンコック総督がやってくる。民主主義の象徴であるハンコックと過去の遺物であるエスターは対照的な構図を見せる。いつまでもイギリスの価値観などすべてを大切に守り通すエスターが死を迎え、ハンコックの「前進だー前進だ！我々はもう＜過去＞の子供じゃない！」（“[M]y fellow-citizens, onward – onward! We are no longer children of the Past!” 234）という言葉でこの伝説は締めくくられる。ハンコックのこの力強い言葉が、過去との決別を誓った途端、白々しく虚しく響くのではないだろうか。この結末には、ホーソーンの皮肉が込められているだろう。

第一部から第四部を通して、これらの伝説には、政治的対立の図式があり、アメリカの独立に伴うイギリス側の衰退というテーマが流れているが、それはアメリカ側の勝利を全面的に感じさせるものではなく、ホーソーンの政治的立場は複眼的である。民主主義を叫び、イギリ

スの支配を断ち切ろうと暴徒化するアメリカ、イギリスから完全に独立して他国に負けない新しく強い国を建設しようとするアメリカが、イギリスが体現するものを徹底的に排除しようとする行為に、ホーソーンは懐疑的な視線を向けているようである。ホーソーンの貴族主義的なものへの憧憬の念、また政治的な姿勢としても保守的な一面を垣間見ることができるのである。さらに、この作品に通して見られる暴徒化した民衆についてアイロニーを込めて描かれていることが、次のL. Reynoldsの引用からも窺える。

[Hawthorne] agreed, and the first stories he submitted, a framed set of four titled “Legends of the Province House,” focus on the American Revolution and display the subtle irony with which Hawthorne had come to regard the political behavior of both loyalists and rebels during the period of the royal governors.<sup>18</sup>

つまり、ホーソーンは、秩序を崩壊させかねない人間の抱え持つ暗い面を、アメリカの独立革命の時代の暴徒と重ね合わせているのだろう。

ホーソーンの考える「民主主義」観について、もう少し掘り下げて考察してみたい。例えば短編「僕の親戚、モリヌー少佐」（“My Kinsman, Major Molineux,” 1832）においても、設定された年代はイギリスによるアメリカの植民地が終わりを迎える時代であることが暗示されており、また、イギリス国王によって任命された総督たちが民衆の反乱で次々に投獄されたエピソードも紹介されている。この作品の最後の場面で、暴徒化した群衆の流れにのみこまれないようにロビン（Robin）が本能的にしがみついていた教会と思われる場所の石の柱は暗示的であり、民主主義を豪語するその当時の群衆と一線を画そうとするホーソーンの姿勢が垣間見られる。民衆により体にタールを塗られ、鳥の羽を着けられ、リンチの刑を受けるモリヌー少佐を目撃するロビンの衝撃からも、当時の群衆の考える民主主義に対するホーソーンの危機感が感じられる。作品中の教会の存在がロビンの最後の精神的支柱として示唆されているように、ホーソーンの考えるキリスト教の精神に基づいた民主主義と、当時の考えられた民主主義的政治性には大きな隔たりがあり、そこにはホーソーンの批判的な眼差しが向けられているようである。同じ植民地時代を扱ったこの作品、「僕の親戚、モリヌー少佐」から、「総督官邸に伝わる物語」の一連の作品に通ずるホーソーンの民主主義の概念が浮かび上がってくると言えるだろう。

## 結 論

以上、語りの観点から、また歴史物語の観点から「総督官邸に伝わる物語」を考察してきた。「総督官邸に伝わる物語」では、語り手に全面的に信頼を置くことが難しく、この四部作の語り手のスタンスは、常にアンビヴァレントなものである。それまでのアメリカの歴史が常に一方的な立場から語り継がれ、神話化されてきたこととは対照的である。一般に歴史物語は、史実を基に筆者の独自の歴史認識や解釈が付与され、そこから読者は教訓を引き出すだろう。ホーソーンの場合、歴史の語られ方から、善か悪かといった二項対立的な問題ではなく、物事の両義性を示唆しているように思われる。ホーソーンのような語り手の構造は、例えばピューリタニズムを強く肯定する立場のバンクロフトがアメリカの歴史の神話化に貢献したこととは反対に、「総督官邸に伝わる物語」の中で語った過去の歴史を、ホーソーンの生きた時代のアメリカに重ね合わせて示しているのかもしれない。「総督官邸に伝わる物語」の中での王党派と民衆の対立的な描かれ方が、実は、ホーソーンの語りの構造によって、どちらか一方の立場だけで歴史が語られ、物事が判断されてしまうことの危険性を示しているのである。そして、これらの短編が『デモクラティック・レビュー』に掲載されることを意識しながらも、激動のアメリカを見つめている「民主主義者」ホーソーンが、この作品の中に自分自身の本音をもらさないではいられなかったことが窺える。もちろんそこには、作家ホーソンと読者との駆け引きが存在しているだろう。つまり、ホーソンが、この「総督官邸に伝わる物語」を用いて、アメリカの歴史の脱神話化を働きかけることによって、当時の読者がアメリカの在り方を問い直していくことを願うホーソーンの眼差しが感じられるのである。「総督官邸に伝わる物語」はホーソーンのデモクラティックな立場が一貫して反映された作品であると言えるだろう。

## [注]

- <sup>1</sup> Nathaniel Hawthorne, "Legends of the Province-House," *Twice-Told Tales* (New York, The Modern Library, 2001) 頁数は引用文に続けて括弧に入れて示す。
- <sup>2</sup> "Legends of the Province-House" のテキストからの引用に際しては、文脈上日本語訳を使用した箇所もある。その際、国重純二訳『ナサニエル・ホーソーン短編全集Ⅱ』（南雲堂、1999年）を参照した。
- <sup>3</sup> 阿野文朗 『ナサニエル・ホーソーンを読む—歴史のモザイクに潜む「詩」と「真実」—』（東京：研究社、2008年）、50。
- <sup>4</sup> 異孝之 『リンカーンの世紀—アメリカ大統領たちの文学思想史—』（東京：青土社、2002年）、50。
- <sup>5</sup> 国重純二氏はこのようなホーソーンについて、「驚くほどのバランス感覚の持ち主」であり、「人間を善悪両面を併せ持つ存在として受け入れる、いわば透徹した人間心理研究家」と評している。「『やさしき少年』—歴史、宗教、アレゴリー—」、『文学とアメリカⅡ』（東京：南雲堂、1980年）、50-51。
- <sup>6</sup> Larry J. Reynolds, *Devils & Rebels: The Making of Hawthorne's Damned Politics* (Michigan, The University of Michigan Press, 2008), 27-28。
- <sup>7</sup> 阿野, 52。
- <sup>8</sup> Reynolds, 29。
- <sup>9</sup> 丹羽隆昭 「ホーソーンと民主主義」、『アメリカ民主主義の過去と現在—歴史からの問い—』（東京：ミネルヴァ書房、2008年）、68。
- <sup>10</sup> 丹羽, 67。
- <sup>11</sup> 入子文子 『「ある鐘の伝記」を読む—ホーソーンにおける歴史と詩学の交錯—』、『独立の時代—アメリカ古典文学は語る—』（東京：世界思想社、2009年）、122。
- <sup>12</sup> 鴨川卓博 『「語られた」歴史—ホーソーンの歴史物語』（神戸市外国語大学 研究叢書 第23冊、1993年）、49。
- <sup>13</sup> Michael J. Colacurcio, "Masque and Anti-Masque: A Contest of Histories," *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales* (Durham, Duke University Press, 1995), 398。
- <sup>14</sup> 鴨川, 59-60。
- <sup>15</sup> 阿野, 17-18。
- <sup>16</sup> 本間長世 『共和国アメリカの誕生—ワシントンと建国の理念』（東京：NTT出版、2006年）、117-18。
- <sup>17</sup> Reynolds, 29。
- <sup>18</sup> Reynolds, 31。
- <sup>19</sup> Reynolds, 27。



## Bibliography

- Colacurcio, Michael J. “Masque and Anti-Masque: A Contest of Histories,” *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne’s Early Tales*. Durham, Duke University Press, 1995.
- Hawthorne, Nathaniel. “Legends of the Province-House,” *Twice-Told Tales*. New York, The Modern Library, 2001.
- Reynolds, Larry J. *Devils & Rebels: The Making of Hawthorne’s Damned Politics*. Michigan, The University of Michigan Press, 2008.
- 阿野文朗 『ナサニエル・ホーソーンを読む—歴史のモザイクに潜む「詩」と「真実」—』 東京：研究社、2008年.
- 入子文子 『『ある鐘の伝記』を読む—ホーソーンにおける歴史と詩学の交錯—』、『独立の時代—アメリカ古典文学は語る—』 東京：世界思想社、2009年.
- 鴨川卓博 『『語られた』歴史—ホーソーンの歴史物語』 神戸市外国語大学 研究叢書 第23冊、1993年.
- 国重純二 『『やさしき少年』—歴史、宗教、アレゴリー—』、『文学とアメリカⅡ』 東京：南雲堂、1980年.
- 巽孝之 『リンカーンの世紀—アメリカ大統領たちの文学思想史—』 東京：青土社、2002年.
- 丹羽隆昭 『ホーソーンと民主主義』、『アメリカ民主主義の過去と現在—歴史からの問い—』 東京：ミネルヴァ書房、2008年.
- \_\_\_\_\_ 『恐怖の自画像—ホーソーンと「許されざる罪」—』 東京：英宝社、2000年.
- 本間長世 『共和国アメリカの誕生—ワシントンと建国の理念』 東京：NTT出版、2006年.

